白鷗大学法政策研究所年報　第11号（2018. 3 ） 9 -30

講演録

政治のこれから

―足尾鉱毒事件とリベラル・デモクラシー―

主　催　白鷗大学法政策研究所

開催日　2017年11月29日

岡田順太（司会）　本日は法政策研究所主催講演会にご来場頂きありがとうございます。私は、当研究所の所長を務めております岡田と申します。本日の司会を担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。それではまず始めに法学部長の河原よりごあいさつをさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

河原文敬（法学部長）　こんにちは。河原と申します。本日は法政策研究所の講演会に多くの方がご参集していただき感謝申し上げます。法政策研究所は、年に１回こういった講演会開いております。テーマによって、参加者は少なかったり、今日のように多かったりということを繰り返しております。

本日は表題のとおり「政治のこれから」ということで、井出先生、三浦先生に講演を賜ることになります。足尾、渡良瀬遊水地、谷中村、楢葉市、双葉町といった所は地理上の上では日本の一地域ということになります。しかし、これが歴史的、社会的な文脈の中では非常に重い、そして重要なテーマをわれわれに投げ掛けてくれる場所となっております。自由が丘、銀座とは異なるトーンを持っています。両先生それらの地域のテーマを20数年にわたって研究されて、一つの成果をまとめられております。時代の吐瀉物の中にうずもれた希望の断片を再構成するという非常につらい、しかも長い長い研究の成果をまとめられております。その成果の多くの部分が今日披瀝されることかと思います。皆様にとって有意義な講演会であることを祈念いたします。以上です。

岡田　どうもありがとうございました。それでは早速でございますが、講演の第１ということで、三浦先生より田中正造と足尾鉱毒問題ということでご講演を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

［基調講演１］

田中正造

―土から生まれたリベラル・デモクラット―

三浦顕一郎（法学部教授）　ご紹介いただきました三浦と申します。これから30分という短い時間ですが、田中正造についてお話しさせていただきます。

まず、田中正造とは誰かということですけ

れども、場所によっては全く知らないという地域もあるかと思いますが、この辺りでは多くの方々がご存知かと思います。田中正造とは、簡単に言えば、足尾銅山鉱毒問題の解決に生涯をささげた人という一言に尽きる、単純と言えば至極単純な人です。そうした田中の人生の特徴というものを一言で述べるならば、「最弱をもって最強に当たる」という、これは田中の言葉ですが、田中正造の人生の特徴を一言で述べればそういうようになると思います。「私の多年の、長年にわたる楽しみは何かというと、社会の最も勢力なき人々、最も勢力なき弱き人々を合わせて、強き傲慢を排することである。私の行為の十中の九はこれである。最弱をもって最強に当たることが私の楽しみである」と。まさに田中は最弱をもって最強に当たり続けた人生を送った人でした。

彼は天保12年11月３日、西暦で言えば1841年12月15日、下野国安蘇郡小中村、現在の栃木県佐野市小中町に生まれ、長じて名主となります。名主になって六角家騒動というものに遭遇します。当時、この時期は幕末ですね、幕末、多くの領主が財政難にあえいでいました。そうした中、六角家、これは小中村の領主の一つですが、その六角家の筆頭側用人の林三郎兵衛という人が中心となって新税、新しい税です、新税の取り立てや、それに対する抵抗を抑えるために領内分断策、ある村からは取り立てて、ある村からは取らないということをして、一致して抵抗するということがないようにする、そうした策を弄して財政難を埋め合わせようとします。小中村の名主として田中はこれに敢然と抵抗を挑みます。そのため、彼は江戸監獄にぶち込まれます。身動きもできないような、手足を伸ばそうと思ったらあおむけになって手足を伸ばし、背中を伸ばそうと思ったら四つんばいになって背中を伸ばさなければならないような、そういう牢獄に閉じ込められます。そのような辛苦、苦しみをこの闘いは田中に与えたのですが、田中はくじけることなく闘い続けました。

田中を行動に駆り立て、支えていたものは何であったか。そのヒントは彼の母親が田中に出したという手紙にあると思われます。その手紙の中で母親は「林一派との戦いは、天下国家の大問題――当時は幕末ですから、攘夷だ、佐幕だ、勤皇だ、入り乱れてました――そうした天下国家の大問題に比べるまでもなく小さなことだけれども、決しておろそかにしてはいけない問題です。名主としてゆめゆめ忘れてはなりませんよ」と。田中もそうだと思って奮闘したと述べています。つまり、天下国家の大問題よりも村の人々、村の人々の生活を守る、そういうローカリズム、在地の思想が田中を支えていたと思います。

やがて明治維新となって、六角家騒動は喧嘩両成敗の形で終わります。維新後、田中は自由民権運動に乗り出します。そして、多くの自由民権運動家たちと同じく、国会開設建白書を書き上げます。彼が書いた国会開設建白の最大の特色は何か。私は彼が次のことを強調している点にあると思います。どういうことを強調しているかといえば、国に政府があるのは人民の福祉を図るためであると。これを同一文書の中で何度も何度も繰り返しています。それは彼がそれを言いたかったんだろうということを表しているのではないかと思ってます。そして、田中のこの特色は、他の国会開設建白書とは大きな対比をなしております。有名な板垣退助たちの民選議院設立建白書や国会期成同盟による国会開設請願書は、国会を設ける理由として、国会をつくることによって国民に参政権を与え、それによって国家のことを我が事、自分のことのように思う国民ができる、それによって人民と政府が一体となることができ、国家が強くなると。そのために国会をつくるべきなんだというのが彼らの国会開設の趣旨でした。田中は、国家と国民、政府と人民を峻別、分けて考えて

いました。先ほど話しましたように、田中にとって政府は人民の福祉を図るために存在しているものでした。田中にとって政治とは人民を幸福にする営みであり、政治家とはそうした営みに奉仕する人間なのだと。これが田中の政治観でした。

明治23年、1890年７月、日本で最初の衆議院議員総選挙が行われます。田中はこれに当選して衆議院議員になりました。翌年夏、地元の人から聞かされて足尾銅山鉱毒問題の存在を知ります。その年の暮れの第２議会で田中はこれを取り上げて、以後、死ぬまでの田中の足尾銅山鉱毒問題との闘いが始まります。

他方、衆議院議員として、例えば明治32年３月、時の内閣、第２次山縣有朋内閣が地租増徴、土地に関わる租税ですね、地租を増徴する法案を議会に提出します。どうしてもこの地租増徴案を成立させたかった山縣内閣は、議会の反対を封じるために議員歳費値上げ法案いうものを提出します。議員の歳費、年間の給料ですね、800円から2000円に引き上げると。田中はこれに反対します。彼によれば国民が税金に苦しんでいる現在、自分の懐を暖める議員歳費増加案は認められない、議員は国家の歳計を決める大きな権利を持っている以上、自分が受け取る歳費、給料について慎み深くならなければならないと、こう述べて田中は反対します。しかし、議員歳費値上げ法案は議会を通過します。田中はただ一人、全ての衆議院議員の中でただ１人、この歳費は受け取れないと言って、歳費の受け取りを辞退します。変わった男です。ですが、政務活動費の使い道に困って無理やり使ってるような現状を考えてみれば、素晴らしい変わり者だなと思います。

その後、有名な川俣事件、被害民と警察官が群馬県の川俣という所で衝突して逮捕者が出るといったような川俣事件が起きたり、それに憤った田中の有名な亡国演説、もう日本という国は亡んでいるといった演説があったりしますが、時間の関係上省略します。

三浦顕一郎教授

いずれにせよ、議会活動を通してはなかなか鉱毒問題が解決しない、それどころか議会は議員歳費値上げ法案を増税案とともに通過させてしまうような場所だ、議会活動に失望した田中は明治34年10月衆議院議員を辞職します。そして、その年の12月明治天皇に直訴します。天皇直訴事件です。幸徳秋水に原案を書いてもらった直訴状を天皇に手渡そうとしたんですが、それには失敗します。はかまの裾を踏んづけて転んだからとも、警護の警官に阻まれたからともいわれます。

彼が渡したかった直訴状を天皇に手渡すことには失敗しますが、これは大事件となって新聞号外が出て、世論が大いに盛り上がります。石川啄木が反応したり、『貧乏物語』で有名になる河上肇が自分の着ている服を被害民に渡してくれと言って外套を脱いだりとか、世論の反響を巻き起こします。

そうした中、時の内閣、桂太郎内閣は世論の鎮静化を図るため鉱毒調査委員会を設置します。前にもあったので、通称、第２次鉱毒調査委員会といわれるものです。委員会は調査の結果、翌明治36年３月、桂内閣に答申します。どういう答申だったかというと、谷中村の遊水地化という解決策の答申でした。今

の渡良瀬遊水地です。つまり、谷中村を遊水地にすることで渡良瀬川の氾濫を防ぎ、それによって渡良瀬川の河床に存在する鉱毒の拡散を食い止めようという解決策ですね。これを答申します。

田中はこの解決策に反対します。いくつか理由はありますが、主なものを挙げれば、まずなによりも、そもそも問題の原因を作り出している足尾銅山の操業を止めるべきだ。二つめは、この解決策は不公平であると。なぜ一部の人々が犠牲にならなければいけないのか、不公平であろうと。三つめ、この解決策は谷中村の人々の人権、土地に対する所有権を侵害し、また村の運命を村が決めるという自治権を侵害するものであると。四つめ、政府は足尾鉱山が公益を生み出すといって放置するけれども、谷中村の人々だって納税と兵役の義務をちゃんと果たしている、それだって公益だと。

明治37年７月、田中は谷中村に移り住み、谷中村の遊水地化、谷中村の廃村に抵抗します。しかしながら、翌年から翌々年にかけて谷中村の買収は進んでいきます。谷中村に住んでいた人々は、例えば野木、古河、那須など、いろんな所に移住していきました。そこでは「谷中上がり」といわれて差別を受けたそうです。あたかも現在、原発避難している人々のように。谷中村の人々は、遠くは北海道まで移住しました。北海道の中の最も開拓の進んでいなかったオホーツクのほうに移住先が指定されていきます。北海道開拓は明治政府の一つの目標でしたからね。今でも、北海道の佐呂間町には栃木地区というのが残っています。それも彼らが移り住んだ場所です。さらに明治40年６月29日にはそれでも残っていた人々の家屋の強制収用が行われます。行政上なくなってしまった谷中村の復活を目指して田中は文字通り東奔西走します。各地に陳情したり、世論喚起に努めたり、あるいは本当に遊水地は不可欠なのか、河川調査に駆けずり回ります。そうした過程を通して彼の思想も深化していきます。そのいくつかをレジュメに並べてあります。

残りの時間が少なくなってきましたので読み上げることはできませんが、簡単に申し上げますと、国は人と同じで体格が良いからといって必ずしも尊いわけではない、国は人と同じで腕力があるからといって尊いわけではないといった国家観や、真の文明は山を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし――これは東日本大震災以降、とりわけ福島の原発以降有名になった言葉ですね――といった文明観、あるいは人は万物の長でなくてよろしいという自然との共生の思想、こうした思想を彼は深めていきます。

とはいえ、既に田中は高齢でした。大正２年、1913年８月３日、彼は先ほど述べた河川調査の途上で人の家の庭先に倒れます。そのままその家に担ぎ込まれて、その家で病床に就きます。結局、治ることなく９月４日死去します。胃がんのためといわれています。残されたものは菅笠と合切袋、いわゆる信玄袋、何でも入れておく袋ですね、合切袋。袋の中に入っていたのは河川調査の草稿、新約聖書、採取した川海苔、それから晩年楽しみとしていた小石集め、きれいな小石を集めるのが好きだったみたいですね。小石三つ。それから大日本帝国憲法とマタイ伝の合本とじ合わせたもの１冊、日記３冊、鼻紙数枚。これが田中の全財産であったといわれます。こうした田中の生涯は結局のところ、国民、とりわけ先ほど述べましたように最弱、最も弱い人々の側に立って、国民、あるいは最弱の人々の権利や幸福や生活や命を守るために闘い続けた人生、田中はそういう人だったといえると思います。

田中の死後になりますが、大正５年、吉野作造が「国家中心主義、個人中心主義」という論文を著しています。その中で吉野はまず国家と国民は本来は相補的である、お互いに

補い合うものであると述べます。国家の国防なくして国民の安全もないですし、国民の繁栄なくしても国家の繁栄もないですから、本来は相補的ではあると。そのことを認めた上で、吉野は、しかし両者は現実には往々にしてぶつかるものだと述べます。どちらかが強調されすぎ、他方は軽視されがちである。これまで明治維新以降の日本はあまりに国家本位であったから、これからは国民本位ということを考えるべきだと、この論文の中で吉野は説いています。田中は、そうした国家本位の時代に、国民本位の政治を追求した人と言えましょう。

現在、基本的人権を口にしたら時に笑われるような時代、国民の権利や自由よりも、国益や公益、例えば自民党の憲法改正草案もそうですが、国益や公益、秩序、責任、義務、そうしたものが国民の権利や自由よりも強調される時代だからこそ、田中の政治姿勢と政治思想と政治行動は見直されるべきであると私は考えているところです。ご清聴ありがとうございました。

岡田　ありがとうございました。それでは、二つ目の講演でございます。追手門学院大学から井出明先生にダークツーリズムと政治ということでお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

［基調講演２］
ダークツーリズムと政治
―小山市から考える―

井出明（追手門学院大学経営学部教授）　ただ今ご紹介いただきました追手門学院大学の井出と申します。現在の専門は観光学ということになっているんですけども、もともと修士までは憲法をやっとりまして、紆余曲折を経て、なぜか観光の専門家になってしまいました。憲法を勉強したことが実は今の研究、

井出明教授

教育にかなり生きております。今日、学生さんもたくさんいらっしゃるみたいですけど、「六法科目勉強して何の役に立つのか」というのが今、漠然としている学生多いかもしれませんが、10年後、20年後に突然役に立つこともありますので、一生懸命勉強していただきたいと思います。

それでは、始めさせていただきます。お手元にスライドを印刷した配布物がありますので、それに従ってお話をさせていただきます。私の講演会は「ダークツーリズムと政治、小山市から考える」ということで、小山に呼んでいただいたので小山市の視点を入れさせていただきます。あと、足尾銅山の渡良瀬川の上流域と下流域を対比的に観光学から捉えるとどうなるか、そうするとどういう記憶を承継していくことができるのかという話でまとめさせていただきました。

ダークツーリズムとは何か

井出　ダークツーリズムという概念ですが、初めて聞かれた方もいらっしゃると思います。ヨーロッパではもともと観光の研究は盛んだったんですが、観光客の移動を分析してみると、どうも観光客っていうのは楽しい所

だけに行ってるわけではなくて、戦争や災害等といった一見、観光資源にならないような悲劇の場所を結構訪れていることが90年代に分かってきました。それを発表したのがイギリスの当時グラスゴーカレドニアン大学にいらっしゃったレノン先生とフォーリー先生という方です。1996年に戦争や災害をはじめとする人類の悲劇の記憶を巡る旅をダークツーリズムと名付けようという新しい概念を提唱したところ、結構な勢いで賛同を受けまして、このダークツーリズムという概念が確立していきます。

ところでヨーロッパの場合、アフリカもそうですけども、負の遺産っていう日本語的な言い方がなくて、なかなかこの負の遺産の概念を欧米人に説明するのは難しいんですね。世界遺産のことをworld heritageといいますけど、世界遺産の第一次の登録の段階で既に西アフリカの奴隷貿易の基地なんかが世界遺産に登録されていて、ヨーロッパの人たちはこれも当然遺産だろうというふうに考えていました。次の回にはもうアウシュビッツが入っていまして、heritageという概念には当然ネガティブな要素が含まれますので、日本語の「負の遺産」というところだけを取り分けようとしてもよく分かってもらえないところがあるのです。ダークツーリズムがヨーロッパで受け入れられたのは、こういう「悲劇の記憶」も当然、記憶の承継として重要だと言う考え方が背景にあります。光の記憶だけでは人類は成り立っていないっていうことをヨーロッパの人たちは、割と意識しています。それでダークツーリズム概念も抵抗なく受け入れられました。

日本人にとってのダークツーリズムというのは、修学旅行における学習観光等の一形態として以前から存在していたことは確かなんですね。ただ、一般にダークツーリズムというと、そんなに「勉強勉強」という話ではなくて、「祈りをささげる」とか、「死の悲しみを共有する」とか、そういった心情的なものがメインになります。とはいうものの、教育と慰霊や鎮魂が矛盾するわけではないので、そういった悲しみの記憶をたどる旅を一般にダークツーリズムと呼ぶのだと思っていただければよいかと思います。

ダークツーリズムという概念が現れた20世紀終わり頃には戦争や災害ぐらいしか例がなかったのですが、今は研究が爆発的に進みまして、最近は刑務所・隔離施設・産業遺産などに拡大していきました。刑務所だといろんな刑務所ありますけど、網走監獄みたいなものも入りますし、マンデラがいたロベン監獄島とか、ああいったものも入ります。あと、隔離施設というのは、日本でいえばハンセン病療養所などを指しますが、ある病気にかかった方を、強制的に隔離しておくのは近代のやはり陰の部分です。産業遺産だと、きょうこれからお話しする足尾銅山の話とか。また、渡良瀬遊水地みたいな環境問題も含んだ場所もダークツーリズムの対象となります。

世界的な研究もここ2000年代から爆発的に拡大するんですが、日本では10年ぐらい遅れてブームが来ました。日本では2011年の東日本大震災以降この考え方が急速に広まります。2013年に、流行語大賞にノミネートされました。当時、哲学者で東浩紀さんという方がこのダークツーリズムという考え方に大きな関心を寄せまして、あの方は福島第１原発の事故というのは哲学思想の問題だというふうに捉えていましたから、科学哲学を根本から揺り動かすような事故をどのように後世に伝えるかといったときに、そのダークツーリズムっていう考え方が非常に有効だと考えられたようでして、さまざまな文書を発表されました。その過程で私と彼が知り合って何冊か本を共に出しています。これが「ダークツーリズムとはなにか」という前置きですね。

ダークツーリズムの対象としての足尾銅山

次に、ダークツーリズムの方法論を使って足尾銅山を見ていくとどうなるかという話なのですが、ダークツーリズム的な足尾鉱毒というと、実はかなり広い範囲になります。上流の所から渡良瀬遊水地まで車でノンストップで走っても100キロぐらいあって、２時間ぐらいかかってしまう。いろんな所を見ていったらかなり時間がかかって、それなりに広域の観光になります。上流域と下流域で住民の皆さんの意識もかなり異なっています。

上流域の方も足尾銅山の歴史館あたりでは明治日本の輝かしい産業遺産として足尾銅山を捉えています。これが私の作った『ダークツーリズムジャパン』という雑誌の２号ですが、「産業遺産の光と影」というテーマで、上流から下流まで旅をした紀行文を載せています。上流域の人たちは足尾銅山の記憶を非常にポジティブに捉えていて、この足尾銅山の周りには遊郭もあって非常ににぎわった場所であると認識しています。産業遺産のある町は昔、労働者がたくさん住んでいたので、歓楽街は必ず発展します。九州のほうの炭鉱街なんかも最盛期はかなりの歓楽街が発達していました。日露戦争時の銅の精錬なんかでもかなり潤いまして、上流域はあまり公害のイメージがないんですね。銅の精錬の煙で木が枯れたというのはありましたけども、全体として経済は好調だったので、あんまり足尾銅山に対して「負の遺産」という意識がないのです。

ただ、いろいろ回ってみますと搾取の痕跡はありまして、捕虜を始めとする中国人への労働強要については、慰霊碑が作られています。朝鮮半島から渡ってこられた方々の慰霊モニュメントもありますが、これは慰霊碑を作る活動の途中で強制か否かというので政治問題化しまして、立派な慰霊碑は未だ作られず、木の墓標が立っている状況です。寂しい状況であるのですが。ただ、搾取もあったということはこの辺りからは窺えるわけです。

上流では全体の経済は好調で、輝かしい明治日本の産業遺産という立ち位置なのに対して、一方、下流域のほうは、かなり意識が違うわけですね。この右下のハートマークのところ、まさに渡良瀬遊水地ですけど、ここに渡良瀬川が接続しています。西から入っていますね。小山の話をしますけど、小山の場合はこの西から入ってきた鉱毒水とは直接には関係ないものですから、そうすると、佐野とか板倉あたりと小山の人たちの感覚っていうのは少しずれてくるものがあります。これはどっちが正しいとかそういう話ではなく、結果論として出てくるところかと思います。

最近、渡良瀬遊水地絡みで論点というか観光絡みでよく取り上げられるのが、「埼玉・群馬・栃木３県の県境はどこか？」という話です。これは毎日新聞の電子版ですけども、「渡良瀬川に絡んで県境がはっきりしない場所があり、明治以降動いてきたようなので、これを観光資源にしようとする話が持ちあがっている。」という報道があります。この毎日の記事は踏み込みが足りなくて、朝日の方は割とちゃんと書いてあったんですけども、これは渡良瀬川が何度か氾濫するうちにお互いに後始末を押し付け合って、それで県境ははっきりしなくなるわけですね。その部分では、過去への反省が必要なのだけれども、そういったことには言及せず、「明治以降動いていた三県の県境は珍しい」ということしか言っていないのです。なぜこういった現象が生じたかという由来の部分にはほとんど触れないまま、観光に使おうととしています。

また、栃木県側と群馬県側でも意識がかなり違うかと思います。渡良瀬川は群馬県側も当然流れているわけですけども、群馬県側の人たちはかなり怒ってるんですね。足尾銅山自体が栃木県と渡良瀬川の上流にあって、栃

木県の人たちは潤った人たちもいるかもしれないけれども、群馬県側の板倉町とか太田市なんかは農業の被害が甚大となるわけですね。太田では、地元の議員さんが頑張って鉱毒対応をしたという記念碑が立っています。鉱毒については昭和40年代ぐらいまでずっと影響が残っていて、太田市足尾鉱毒展示資料室開室の展示資料を見ると、足尾銅山に対してかなり批判的な記述が多いのです。

そこで明治政府はどうしたかというと、谷中村をスケープゴートのようにして村をつぶして遊水地を造るという案を考えます。それを使って鉱毒を防ごうとするわけです。田中正造研究者の方々の中に、あの案に関しては下流域の地域間の離間政策だという解釈をされる先生も多くて、私も何カ所か回ったのですが、まさにそのとおりだと思います。谷中村をつぶすことで多くの他の村が幸せになれるのだということになると、下流域の自治体同士の団結が崩壊します。

その後、谷中村はどうなってしまったかというと、栃木県全体ではその足尾銅山を守ったほうが経済的には合理性あるので、谷中村はつぶされてしまいます。村民たちの多くは、北海道のサロマに当時の村長と一緒に移住していきますが、一部は田中正造と共にここに残ります。北海道の方も何度か私は行っています。サロマ湖、日本第３位でしたかね、大きさの湖ですけども、佐呂間町自体はカキやホタテの養殖などで現在は豊かなのですが、明治時代は未開の原野で、しかも谷中村の人たちが移っていった先は山奥なのですね。現在は北海道佐呂間町栃木地区という名称で、畜産農家の方が中心となって農業をされています。移住した人たちのふるさとへの思いは強くて、このことは原発事故で故郷を追われた福島の人々との関係性を考えるべきではないかと思っています。移住先で生活できればそれでいいのかというと、自分たちのアイデンティティーを持って移住していくわけですので、社会学でディアスポラといわれる移民社会の在り方なのですけども、ロサンゼルスにある日本人会では実はわれわれ日本に住んでいる日本人よりも日本文化を大切にしたようなイベントや催し物が行われますし、それはブラジルでも同じように行われます。佐呂間地方に移った谷中村の人たちは栃木県の記憶を非常に大事にしていて、栃木神社というのを造りまして、日光山の多門寺の一部を移すような形で栃木の記憶を持って佐呂間に渡ります。ところが、この移住先がなかなか厳しいところなので、生活が苦しくて帰りたいという人たちが出てくるんですね。帰りたいという人たちが一体どの時代までいたかっていうと、これは佐呂間町の人たちが頑張って聞き取り調査をやって、町の資料に残してくれています。大したもんだなと思って、私も感動してふるさと納税を佐呂間町にしてしまったぐらいです。インターネットでも公開されていますけども、昭和40年代ぐらいまで栃木に帰りたいっていう人たちがかなりいたんですね。１回も栃木を見たこともないのに栃木に行きたいっていう人がなぜで出るのだろうと思って文献、聞き取り調査を見てみたのですが、おじいさんの代に谷中村から佐呂間に来ると、おじいさんが谷中の記憶を持っていて、佐呂間で生まれたその孫に、「谷中はいい所だった」というふうに語り掛けたようです。孫にはそれが刷り込まれ、北海道の生活がつらい場合は谷中という所に行くと何かいいことがあるんではないかということで、住んだこともない地域に対する望郷の念というのが浮かび上がってくるみたいです。この辺りはユダヤ人のExodusに近いようなイメージで私は捉えています。

帰還の問題っていうのは福島の原発においては非常に大きな論点ではあるのですけども、非常に短期的な帰還を今の政府は目指しています。この谷中村の例を見ると、100年のスパンで考えないと帰還っていうのは実はでき

ないんじゃないかと思います。住んだことがなくてもそこに行きたいという、先祖も含めた自己のアイデンティティーみたいなものがあるので、もっと長い時間で帰還の問題は考えなければならないと思っております。

その次ですが、旧谷中村、今の渡良瀬遊水地に行くと観光ルートの一部としてある所がこちらです。旧谷中村に観光ルートで行く場合、起点はどこになるかというと、小山が起点になることあんまりないと思うのですね。大体、佐野市の側からアプローチすると思います。佐野市の側は田中正造の記憶は非常に大切にしています。佐野市の博物館に行くと、田中正造に関する記載はたくさんありますし、田中正造自身は亡くなるときに銅像を造るなって言っていたのですが、その割に佐野市に行くと銅像いっぱいあって、すごく不思議な感じがします。故人の意思を無視して銅像造っていいのかと思うのですけども、たくさん田中正造の銅像があります。

それから、後で討論なったときに質問させていただこうと思っているのですが、田中正造自身はリベラル・デモクラットでまさにあって、左派運動そのものには割と距離を置いておりました。大逆事件の幸徳秋水と田中はお互いに尊敬はし合うものの、運動としては結合せず、いわば高度な信頼関係があるのも見えてきます。

佐野市なり栃木県なりは鉱毒のあった場所だという記憶は消したいのだけれども、田中正造は誇りたいというパラドックスがどうもあるようです。佐野市の博物館に行ったら鉱毒の話とかあんまないんですね。ですけど、田中正造が活動したという話はいっぱいあって、その辺り、鉱毒の話をしないと田中正造の偉大さが分からないと思うんですが、鉱毒の話はあまりでてこない。この佐野市のキャラクターっていうのは、今はさのまる君ですけど、昔はしょうぞうくんだったんですね。田中正造をイメージキャラクターに使うと市の観光政策としては実は結構難しいところがあります。というのは、先ほど申し上げたように、足尾銅山の毒の元というのは上流にあって、佐野市は被災地なわけです。一般に東京に住んでいる人とか、私みたいに大阪に住んでいる人が足尾鉱毒っていったときに、佐野市とか、もちろん小山は直接の被災地じゃないですけど、小山とか、板倉とか、そういったものを思い出すのかっていうと、全く思い出さないんですね。ところが佐野市でしょうぞうくんをキャラクターで使っていると、「佐野市って鉱毒の被害受けたんですか」ということをいわれてしまって、突然風評被害が発生するんですね。そうするとこれがもう使いにくくなってしまう。そこでどうするかというので出てくるのが、このさのまるなわけですね。さのまるはラーメンの丼かぶっていますけども、佐野市でラーメンが発達したっていうのは、歴史的な経緯があります。実はB級グルメというのはダークツーリズムの研究の宝庫なのですこし与太話をしてみます。佐野にはゴルフ場いっぱいあります。ゴルファーが3時か4時ぐらいにラウンド上がって、東京に車で帰ってくる途中でちょっと小腹がすき、家に帰ればちゃんとしたご飯はある場合、なんか食うかということでラーメンをすすってみたら結構うまかったため、ゴルファーの間でラーメンの情報が交換されまして、佐野がラーメンマニアの聖地みたいになってくるわけですね。このさのまるが刀のように差している芋フライ、私が聞いたところだともともとこの辺りに繊維産業等の工場があって、そこで働いてた若いお姉さんたちが小腹を満たすためにあいったファストフードを、ですけどローカルフードでありソウルフードであるフライを食べて、おやつ代わりにしていたそうです。さのまるは食文化の記憶と地域の記憶を結合させたものなんですね。

ゴルフ場というのは、学生さんが3年生になって行政法やるようになると、結構、判例

百選なんかにも出てきて、環境問題と切っても切れない関係にあることがわかります。渡良瀬遊水地も環境問題の学習素材になりますので、環境被害を負ったという悲しみの記憶を消さないようにして将来につないでいくことを佐野市には考えていただきたいなというふうに思います。

現状ですが、渡良瀬遊水地は平成２年までずっと土木工事としては造られ続けますし、土地としては特にメンテもせず放っておかれたわけです。そうすると、この渡良瀬遊水地は国土交通省にとっては明治以降のある種の「負の遺産」ではあるんですけども、100年放っておくと水鳥の生息地になってしまいまして、世界有数のきれいな湿地帯になってしまうのですね。そうすると、環境省にとっては非常に素晴らしい地域資源だっていうことで、日本政府においても役所によってこの渡良瀬遊水地の位置付けはかなり違います。小山市は先ほどの西側から入ってくる鉱毒の川とも水系が違います。同じ渡良瀬遊水地と言っても、小山には鉱毒の被害は基本的にはないんですよ。ですけど、渡良瀬遊水地の一部が小山市に入ってまして、最近になってラムサール条約に指定されたので、これを奇貨として、小山市はラムサール条約でブランディングをやっています。小山市のブランディング戦略としては、鉱毒を思い出させずラムサール条約指定地という部分を使ってブランディングしたいっていうことで、「ラムサールふゆみずたんぼ米」というコメを作ったり、酒米で造った酒を醸造したりもしています。これらはかなり美味で、私も買って飲んだり食べたりしました。

この小山の取り組みを私も先ほど紹介した本で記事にしたかったので、小山市役所まで行ってダークツーリズムジャパンの第１号を献本して、これを記事にしたいと申込んだのですが、「ふさわしくない」ということで掲載が拒否されまして、さらには献本が返送されてきました。献本が返されたっていうのは私の長い学者人生でここだけだったので結構いまだに腹立たしい思いは残っています。小山市としてはこのダークツーリズムジャパンの足尾銅山の話の中にふゆみずたんぼなり、お酒が載ってしまいますと、今まで切断されていた鉱毒の話と、これまでのブランディングが結び付いてしまい、風評被害が起こりかねないということを恐らく心配したのだと思います。

渡良瀬遊水地の領域を有する自治体の姿勢としてそれが正しいのかというと、小山市自身は流路水系が違うので確かに鉱毒の被害は受けてはいないわけですが、ただ、渡良瀬遊水地という非常に悲しい記憶を持った場所をいろんな経緯で一部共有するようになった以上、そこに対する社会的責任を市は果たすべきだと思うんですね。きょう午前中に、小山市の博物館に行って、渡良瀬遊水地がどう紹介されているのかを見に行ったんですけども、基本的に撮影禁止なので、まずそれを何とかしてほしいと思います。昔、和歌山県立博物館も撮影禁止だったんですけども、関係者が頑張って、観光立県にするのであれば今はTwitterとかインスタに載せないとお客さん来ないからっていうことで、去年から撮影できるようになったんです。小山市の博物館、展示物を見ましたが、そんなに撮影禁止にしなきゃいけないものもなく、多分あまり何も考えないで撮影禁止にして、今も撮影禁止のままだと思います。これは白鷗の先生特に、教育学部の先生がいらっしゃればいいんですが、頑張っていただいて撮影禁止を解除してほしいなとは思います。

さて、これ小学生の指導用に配っている資料で「僕たち私たちの渡良瀬遊水地」というタイトルです。これには先ほど出てきた谷中村をつぶしてしまう話とか鉱毒の話っていうのが一切出てこないんですね。これで古代から延々とラムサール条約の指定地となった渡

良瀬遊水地が存在したかのような誤解を与えるようになっています。ラムサール条約に登録された経緯っていうのは小学生にも分かるような形で教えたほうが社会的責務を果たすという観点からよろしいのではないかと思います。

渡良瀬遊水地が負の遺産なのかというと、これが結構難しい話で、現在、ラムサール条約に指定されて環境学習の場となったことに加え、観光の世界でいうと、エコツーリズムの対象となっているっていうことも確かなのです。他に２年前の水害のときに役に立ってしまったっていうのが実際にあるわけですね。鬼怒川の水域なんかはもう２年前の水害のときにえらいことになってしまって、水浸しになったわけですけど、この辺りは渡良瀬遊水地がまさに水をためてくれたものだから、水害という意味では食い止められたわけです。そうすると、結果論としては渡良瀬遊水地が役に立ってしまったので、単純な「負の遺産」とは言いにくくて、谷中村の人を追い出してしまったことは申し訳ないのだけど、これがあったことで一昨年の水害はしのげたということもあり、これをどう解釈するのかっていうのはかなり難しい問題なんですね。難しい問題だからこそ、地域資源として取り上げる意味がありまして、今後について考えていく必要があるわけです。

渡良瀬遊水地に関わる人々は、実は２系統あります。関係事務所の周りで活動しているNPOの人たちっていうのは、エコツーリズムとして渡良瀬遊水地を捉えていて、素晴らしい環境の学習の場と考えます。一方、歴史に興味のある人たちっていうのは、あまりそういう受けとめ方はしていなくて、谷中村の住民を追い出して、鉱毒が流れ込んだ近代のいわゆる負の遺産の一つだと捉えているんですけども、このエコツーリズムのグループと歴史観光をやっているグループっていうのは、あまり交流がないそうなんですね。いいコラボレーションができればまさにイノベーションが起こるのでしょうけども、あまり関係ないまま今にきてしまっています。

現代の良好な環境があるっていうのは、過去に鉱毒があって、それ故に遊水地を作らざるをえなくなったわけですが、これが100年たってみたら渡良瀬がきれいな環境に生まれ変わったという経緯があるわけだから、現代の環境がいいというのは過去への反省とセットで考えなきゃいけないわけです。ところが小山のパンフレット見ても分かるとおり、あまり過去への反省っていうのがないんです。

教育での世界では最近ESD、Education for Sustainable Development という概念が非常に注目されていて、私のダークツーリズムの研究もこの関係で講演に呼ばれることが多くあります。持続可能な開発に関する教育ということを考えた場合に、この足尾銅山の上流から渡良瀬川を下ってきて、渡良瀬遊水地に至る記憶っていうのは、日本の近代の100年を俯瞰的に見ることのできる、日本では数少ない事例になるはずで、価値は高いはずなんです。100キロぐらいありますし、しかも上流の方は鉄道から見られる景観っていうのがなかなかすごくて、鉄道マニアにも人気のある場所なんですね。上流から鉄道に乗って下ってきて、桐生あたりでは昔の繊維産業の産業遺産の観光なんかとも組み合わせることができて、最終的に渡良瀬遊水地に接続するという、コントラストをつくることができる。そういった観光開発ができるメリットは大きいんですけども。地方都市ではこういったいわゆる「負の遺産」を観光資源に転化して活用しようっていうことをあんまり前向きには考えてくれない。それは私もこの仕事やってると分かるんですけども、説得しなきゃいけない人数が爆発的に増えるんで、どうしてもきれいな景色、おいしいもの、人情とか、そういったもので観光資源化しがちですけども、今、それで観光を開発してる地域っ

ていうのが日本中、山ほどありまして、まさにどの町に行ってもおいしいものがあって、きれいな景色があって、いい人がいるっていうことで、似たような観光地ばかりになるんですね。

ところがダークツーリズムの観点から観光開発すると、ここにしかないことが見えてくるんです。その地の光と影を１カ所で把握でき、統一的に考える事のできるメリットというのが足尾銅山、および渡良瀬川と遊水地の記憶にあるものですので大事にしてほしいものです。

もし、それをうまく地域資源として生かせるんであれば、ここが環境問題の発信源になれるはずなんです。というのは、公害の発生場所と発生源が離れているケースっていうのはいくつかありまして、一番有名なのはイタイイタイ病の例ですね。イタイイタイ病も上流域と下流域で記憶が分断されまして、上流域は岐阜県側に入った神岡鉱山の辺りで、実際、稲作に影響が出たのは現在の富山市内なんです。ここも上流域の人たちと下流域の人たちで全く意識が違うんですね。鉱山側はイタイイタイ病に関して記憶を承継するっていうことを約束して和解はしてはいますが、神岡町のほうではここが公害の源であったという話につきましては、博物館等での展示を作ってないのです。では、何が展示してあるのかというと、ノーベル賞を受賞した小柴昌俊先生がニュートリノを観測したカミオカンデの町として今、ブランディングをやっています。イタイイタイ病の原因の町なんていうのは言えないんですよね。ここの隠し方っていうのは本当に完璧なまでに隠してしまっているので、もし小山が、悲しみの記憶の承継と素晴らしい環境保全を両立させた地域開発ができるようになれば、新しい地域イノベーションの例として、是非全国に発信していただきたい。また、先ほどから申し上げているように、小山自体は川の水系が違うんで、鉱毒の直撃を受けていないわけですから、他の被害地とは違う立ち位置でこの記憶の問題に取り掛かれるはずなんです。あんまり小山市自体が積極的に関わろうっていう意思が見えないので、むしろ頑張っていただきたいなとこういうふうに期待も込めて申し上げる次第です。拙いご報告でしたが、これにて終了させていただきます。

岡田　どうもありがとうございました。それでは、ここで休憩とさせていただきます。

[パネルディスカッション]

岡田　それでは時間になりましたので、再開させていただきたいと思います。後半部分はディスカッションでございまして、先ほどの講演者の方々を含めて、フロアから活発なご意見をいただければと思います。それでは、進行は清水正義先生にお譲りしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

清水正義（法学部教授）　法学部の清水でございます。お二人の先生から興味深い話を伺いました。三浦先生からはおよそ100年前の田中正造という稀有な人物の生涯と闘いについて、静かに、しかし非常に感動的な口調で語っていただきました。それから、井出先生からはその100年後の現在の足尾銅山、渡良瀬川流域と遊水地について現状を興味深く、私どももよく知らないことを含めてお話しくださいました。特に上流と下流の意識の差といった問題は非常に興味深かったと思いますし、それから、いわば第三者と言っていい立場にいる小山市でこれらの歴史遺産を紹介する方法があるのではないかというようなご提言までいただいたわけです。

このお二方の報告をどういうふうに結び合わせるか、なかなか難しいところがあると思いますので、きょうは最初にお二方がそれぞ

れのお話についてどういうふうに聞いたか感想なり質問なりを言っていただいて、それについて答えをいただいた上でフロアにいらっしゃる皆さんのご参加も得て、議論を深めていきたいと思っております。

まず井出先生から、よろしくお願いいたします。

井出　三浦先生のご発表、大変興味深く伺いまして、田中正造という人は右派も左派も田中正造に寄ってきて、彼がハブのようにして幸徳秋水みたいな人たちもいれば、頭山満も田中正造には一目置くと。この右派も左派も一目に置くような政治家っていうのがこれから先、民主主義の中で非常に重要になってくると思いますが、そういった存在が今後日本に出てくるのかなとか、もしくはどうすればそういった右派にも左派にも説得力のある発言ができる政治家をわれわれが育てられるのか、その辺りをもし何かあれば伺いたいなと思うんですが、いかがでしょうか。

三浦　難しいご質問ですね。まずご指摘はそのとおりだと思います。例えば、陸羯南や三宅雪嶺などのいわゆる右派が田中を高く評価し、他方で幸徳秋水や木下尚江、石川三四郎などのいわゆる左派のメンバーも田中を支援ないし支持していたというところで、右派も左派も彼のもとに来るというご指摘はごもっともと思います。

それがなぜ可能であったのかと。質問を受けて考えるので、思い付きでしかないんですが、いくつかあると思います。第一に、国民本位だったからということが挙げられると思います。これも思いつきですが、例えば朝日平吾、大正10年に安田善次郎を暗殺した朝日平吾の斬奸状を読むと、彼は右派ですから、国民はみな天皇の赤子であり、平等であるはずだが、実際には党利党略にふける政党政治家や私利私欲に走る財閥がいる一方、貧苦にあえいでいる赤子がたくさんいる、そういうことをなくすためにすべての土地を国有化せよ、大企業を全部国有にせよとか、左派のようなことを言うんですね。朝日に限らず、現実社会の中で苦しんでいる人々に目を向けるというのは、ある程度共通なのかなと思います。そうした問題をないがしろにする政府を批判するという点でも共通していると思います。第二に、荒畑寒村――彼も左派の著名な人物ですが――が、田中はイデオロギーから入った人でない、土から生まれたデモクラットだと述べています。私は、田中が公権political rightだけでなく、私権civil rightの尊重も説いていたことから田中をリベラル・

デモクラットと呼びたいと思っていますが、ともあれ右派も左派も田中に近づき、彼を支援することができたのは、田中がイデオロギーの人でなく、現実に鉱毒問題で苦しんでいる人々を救うために懸命に何とかしようとした、そうした土から生まれたリベラル・デモクラットだったからだと思います。これからそういう政治家が出てくるかどうかはちょっと分かりません。

井出　ありがとうございます。

清水　ありがとうございます。田中正造の思想を「国民本位」という言葉で説明され、これも一つのキーワードだと思いますので、後ほど議論で深められたらと思います。三浦先生から逆に感想、ご質問なり、お願いいたします。

三浦　非常に興味深い発表で、ひたすらうなずきながら聞かせていただきました。ですので質問というほどの質問はないんですが、ちょっと思ったのは、渡良瀬遊水地の、あるいはこれから福島ということも関わってくるのかもしれませんが、負の側面を負の側面として伝えていくということは現実問題として可能なのか、本当に素朴な質問になってしまうんですが、先生のお考えを聞かせていただければと思います。

井出　ありがとうございます。ダークツーリズムの考え方が急速に発達してきた背景には、旅とか観光をどう考えるかっていうときに、楽しい観光だけだと実は観光としての思い出が薄っぺらになってしまうっていうことがよくいわれます。渡良瀬遊水地もきれいで水鳥が来る場所だっていうだけだと、「へー」とか「ふーん」で終わってしまうんですけど、過去の困難の克服があって今があるっていう、その苦難のストーリーを組み込むことによって訪問したときの感動も思い出深いものになるわけなんですね。

清水先生はドイツの現代史がご専門でございましたけど、世界遺産の第一次の登録にポーランドのクラクフが入っていて、翌年にはもうアウシュビッツが入ってるんですね。その後にヴィエリチカ岩塩坑っていう岩塩の産業遺産が世界遺産登録されてるんですが、この３カ所っていうのは実は結構近くて、アウシュビッツに行く人は別にアウシュビッツだけ見て帰るわけじゃなくて、クラクフとかヴィエリチカ岩塩坑とかを見て２泊３日ぐらいの感じでポーランドの南のほうのツアーを組みます。旅人たちにとっては、アウシュビッツがあることによって、クラクフの街の美しさが逆説的に胸に迫ってきたりするようです。同じような構造は広島と宮島にも当てはまります。広島もダークツーリズムの教科書には必ず載るんですけども、原爆ドームだけでなく宮島も世界遺産でして、この２つは観光資源として結合しています。宮島があって広島があるわけで、この地域は多面的に捉えることが可能になります。われわれ人類というのは楽しいことだけで生きてるわけではなくて、楽しいことも苦しいこともいろいろあって歴史が成り立っています。その苦しいことっていうのがこれもわれわれのアイデンティティーの一部なんだっていうことを地域の人にいかに分かってもらうか、そして観光として開発していくときにいわゆる「負の遺産」というものが旅をすごく意味のある深いものにしてくれるということを啓発していかなきゃいけないとは思うんですね。東日本大震災の被災地に行くと、つぶれかかった震災遺構というものが実は一個一個いろんなコンテクストや意味があり、残しておくことに価値があるものが多いんですけども、地元ではそれを恥だと思っている人もいて、こういった壊れたものはすぐに撤去したほうがいいっていう意見もあります。そこにわれわれ学術関係者が、

遺構の意味と長期的な視点から残す価値について啓発していかなければならないと考えています。

清水　ありがとうございました。非常に興味深い指摘だと思います。たまたまドイツのお話が出ましたので、一言付け加えますと、例えばヒトラーの生家ですね。ヒトラーが生まれた家、今残っておりますが、それをどうするかというので現在オーストリア政府関係者、非常に悩んでいます。あれを残しておくとネオナチの聖地になってしまうんではないか、他方であれを壊してしまうと重要な歴史的遺産が失われるのではないかと、非常に悩んでる最中なんですね。今、井出先生のお話を伺いながら歴史遺産というものをどう残していくか、どういうふうな観点でどういうふうな展観方式で残すのか、こういう点について私も非常に考えさせられたところです。

そこで、今日は大変多くの方に来ていただいております。皆さんもお二方の講演を聴いていろいろなことをお感じになったと思います。質問もあるかと思います。少し皆さんからご意見、ご質問等々お伺いしたいと思います。いかがでしょうか。なかなか最初は発言しづらいかと思いますが、どうか勇気ある最初の発言者を求めたいと思います。

聴講者１　私個人、機械なんかが好きなので、古い痕跡が残っていると、昔の職人が隣にいる様な感覚を覚えたりしますが、何か最近の世界遺産とかいうものは、今様に格好つけて出すような傾向があるように思えます。そういうのはどうかなと思うのですがいかがでしょうか。

井出　もっともなご質問だと思います。実は近代とか産業っていうキーワードに対する意識がヨーロッパと日本でかなり違っています。一昨年世界遺産になった明治日本の産業革命遺産っていうキーワードがありますけど、これは産業革命とか近代という言葉にポジティブな意味を見出し、世界遺産に申請しています。その後、韓国側からいわゆる「強制労働」の歴史を説明していないといって抗議も来たんですけども、ユネスコのほうは割と韓国の抗議をそういうもんだよなって感じで受け止めた節があります。近代産業社会においては光と影の両面があって、科学が発達して医療が発達した等のいい面があると同時に児童労働とか搾取労働とかがあり、さらに公害も発生しまして、近代は必ずしもバラ色ではないわけです。産業社会っていうのも必ずしもバラ色ではないから、産業とか近代っていう言葉が出てきたときに当然そのネガティブな部分も含むというふうにユネスコは思うのです。ところが日本語のイメージにあんまりそういう考え方ってないんですよね。ですから近代化とか産業社会っていったときに、そこになんかものすごく恐ろしいものが入っているという意識が小学校の国語教育の段階でも欠落していまして、「産業」や「近代」という言葉を無条件に良いものであると考えてしまいがちです。そしてもちろん、遺産という言葉も光と影の両面があります。親が借金残して死ぬことも当然あるわけで、世界遺産の考え方ではアウシュビッツも原爆ドームも、「次世代に残すべき価値」に当然含まれます。ところが日本遺産という制度が国内にはありますが、日本遺産にはそういった概念がないんですよね。さらにここまで述べた「近代をどう捉えるか」ということに関して、日本人独特のポジティブ思考みたいなのが最近特に強くなってるような気がして、それは私も危惧するところではあります。

清水　今、井出先生がおっしゃったことの関係で三浦先生にもちょっと聞かせていただきたいのですが、先生は田中正造に焦点を置いてお話しされましたが、もうちょっと大き

く、例えば明治国家ですね、田中という人物をいわばアンチとして置いた場合に明治近代国家をどう評価するかということですね。これは今の井出先生の近代というものに伴うネガティブな側面という問題と関係すると思うので、そこら辺について先生の感覚をお聞かせいただければと思うんですがいかがでしょうか。

三浦　近代日本、あるいは明治国家のアンチとしての田中というご指摘と思いますが、まさにその通りだと思います。それは、一つには、近代化、産業化、足尾銅山の発展の対極に田中や鉱毒被害民がいたという意味でアンチ、あるいは対極として捉えることができましょう。

その一方で、国家本位・国益至上主義の対極に田中がいた。先日、若くしてお亡くなりになられた田中正造研究の第一人者で熊本大学の文学部長をされていた小松裕さんの遺稿集を頂いて読ませていただいたんですが、その中で小松先生は田中を産業化の光と影という項目で高校の日本史の教科書で教えるのはやめてほしいと訴えている。そういう形で思考の枠組みを子どもたちにつくるべきではないと。小松先生は田中と足尾鉱毒問題における生命ということを非常に重視しておられる。近代国家における国民の生命の問題として足尾銅山鉱毒問題を取り扱うべきだと。先ほどの講演で吉野作造の所論を紹介しましたが、近代日本は国民の権利や生命を軽んじて産業化を推し進め、戦争をやり続けてきた。田中には、そうした国家本位であった近代日本に対するアンチという側面もあると思います。私はそこも大事にしたいと思っています。そうした国家本位のところを飾り立てていくことで近代日本をバラ色に見ていくこともできましょうが、田中は、そうした国家本位・国益尊重に対し、国民の権利や生命を優先させたという意味で、近代日本に対するアンチ、対極にあったと思います。

井出　三浦先生に伺いたいんですけども、田中正造は最後に憲法を抱いて亡くなるわけですよね。ということは明治国家体制なりに関しては非常に肯定的な評価をしていて、国家に対する愛情、愛着っていうものはあったと考えてよいんでしょうか。明治国家体制そのものに対する田中の思いというか、どう解釈するとよいのでしょう。

三浦　晩年、田中の憲法に対する評価は揺れ動いているところはありますが、ベースとなるラインは大帝国憲法を評価していたと私は思っています。それは先ほど出ましたけれども、小松先生が指摘されているように、憲法はありがたい、なぜならば斬り捨てにされないからだ、江戸時代は町人が武士に無礼があれば斬り捨てにされて御免だ、斬り捨て御免にならなくなったのは憲法のおかげだと言ってるんですね。田中にとって憲法のありがたみというのはここにあると思います。田中はそれを「憲法の精神」と呼んでいます。国民の生命を守る、国民の権利を守ることを政府が約束する、そういう本来の立憲主義、市民革命期の自由主義が定式化した立憲主義に通じるような「憲法の精神」ということを田中は、言い方はその時々で種々あるにせよ、比較的早い時期から言っております。晩年に田中が憲法の精神を頻りに口にするようになるのは、大日本帝国憲法に限界を感じるようになったからというより、そういう面もありましょうが、それ以上に憲法に具現されているはずの憲法の精神が実際には行われていないではないかという憤りからだったと私は考えています。あと、田中の愛国心についてですが、田中は日記の中で「愛国心というのは国家と国民を愛するもので、政府を愛することではない」と述べています。そもそも国家や憲法がなければ、国民の生命や権利は保障さ

れません。田中は、国民の権利や生命をないがしろにする政府には批判的ではあるけれども、明治国家、あるいは国家というものを否定はしていないと思います。

井出　ありがとうございます。

清水　お話を聞いていて三浦先生の田中像が以前にも増してクリアになってきたように私は聞きました。もう少しフロアの方のご質問、ご感想等々聞きたいですが。

聴講者２　先般は三浦先生に田中正造大学でご講演頂き、今日は楽しみに参りました。私個人、佐呂間町で足尾鉱毒事件の映画や講演をしたり、小山の道の駅で物産展をしたり、足尾見学会なんかもありますが、いろいろ鉱毒事件から歴史を学ぶことがものすごい重要ではないかと思っております。井出先生には、渡良瀬川の上流から下流までを観光化するといったことで良いお話を聞かせていただきありがとうございました。

清水　どうもありがとうございます。何かコメントがあれば。

井出　今日大学でのお招きということで割と学術に寄った話をしましたが、私の専門は観光学でして、観光というのは元々かなり気楽な行動です。そして観光客っていったらかなり気楽な存在なんですね。勉強することが大事なんですけども、勉強しなさいと言うと、もう来なくなっちゃいます。今の福島の復興の一番大きな問題は、福島に対する妙な差別とか偏見とかあるわけですね。放射能にまみれているんじゃないかとか。そんなときに福島に関係する先生たちの中に「勉強してから来てください」と言う方もいるんですけども、勉強してから来てくださいだと、勉強するのが好きな人はそんなにいないので、そもそも行かなくなっちゃうわけですね。観光の強さというのは物見遊山で来た人を取り込める点でして、勉強する気がない人がたまたま遊びに来たら結構面白いじゃないかっていうことで、また今度来てみよう気になってくれると大成功です。渡良瀬川の例で言えば、上流域に来た人が下流の情報を上流域で聞き、今日は日帰りだけどまた別の日に下流域に物見遊山で行ってみようという感じで、気楽な観光がいろんな気付きを生んで、後で学びにつながったりするといいなと思います。仮に学びにつながらなくても、なんか行ったことあるっていうだけで、例えばそこが将来被災地になったときに義援金を送るなどのつながりができるかもしれないのです。観光客なる存在が、日本の戦後の文脈の中では「旅の恥はかき捨て」みたいな悪いイメージで語られることが多かったのですが、今後の高度情報化社会において、観光による緩いつながり、弱いつながりみたいな気楽なネットワークが21世紀型の人間関係になるような気がするんですね。今までだと被災地にボランティアに入るっていったらどっぷり漬かって寝食を共にしてという感じでしたけど、観光で何となく行って何となく好きになって、何年かたったらまた行ってみるみたいな気楽な付き合い方を足尾なり渡良瀬ともできるような道を模索するのもこの地域の将来においては有効な気はします。

清水　三浦先生、この際もしご意見を伺ってよろしければ、栃木県、あるいは渡良瀬川流域のこの地域で田中正造という人を問題にする場合に、先生自身が研究者としてこの地域の人々の目のやり方と言いましょうか、それについてどういうふうな感想をお持ちなのか。非常に憤まんがあるのか、それとも違うのか、そこら辺どうでしょうか。

聴講者３　それと関連して、群馬県側と栃木

県側とで田中正造に対する解釈の違いがあるのか、その辺も踏まえてお話いただければと思います。

井出　栃木県側の各所博物館は結構無理があって、要するに鉱毒のことをあまり表に出さないで田中正造の人となりを前面に出した展示を作って行くのですけども、群馬県館林市の田中正記念館のほうでは「鉱毒に立ち上がった田中正造」という感じで、視点の置き方が違うような気がするんですよね。その辺りは私のうがった見方なのでしょうかね。

三浦　これまた大変難しい。地元だけに、愛着も強いけれども、憎悪も激しい。栃木県内には、田中は馬鹿だっていう人たちもいますよね。一銭でも多く金を取ったほうがいいじゃないか、何が人権だという見方も地元にはあると思います。地元では損得が絡みますからね。田中が生きてるときからそうで、例えば谷中村を救うための義援金、東京からは集まるんだけども、栃木の人たちは出さないと田中は怒っている。なぜならばそこを潰せば自分たちが助かるからっていうね。あと、田中の言う「関東人の箱庭根性」というのもありますし。また地元では、利益を生み出す足尾銅山を守ろうという動きもありました。損得勘定で考えれば、また一銭でも多く金を取った方がいいという立場からすれば、田中は困った男ということになる。いろんな考えが当然ありますよね。ただ、そうやって人権を軽視していった結果、大日本帝国はどうなったかということまで考える必要はあると思います。

栃木と群馬の違いというのは大変興味深いご指摘で、井出先生のご指摘を今度自分でも調べてみようと思います。

清水　いろいろな意見が聞かれたと思いますが、今日は学生も随分参加していますし、こういう所では発言しづらいと思いますけど、気楽に、これはどうなんですかっていうのがあったら聞いていいと思います。いかがですか。

松原和彦（法学部専任講師）　三浦先生、井出先生、非常に興味深いお話をありがとうございました。学生ではありませんが、せっかくの機会ですので、各先生に対して１点だけ質問させ頂きたいと思います。

まず、三浦先生に対する質問です。田中正造の遺品の中には新約聖書があったとのことでしたが（三浦顕一郎『田中正造と足尾鉱毒問題―土から生まれたリベラル・デモクラシー―』（有志舎、平成29年）293頁に遺品の写真が掲載されている。）、宗教と田中正造がリベラル・デモクラットであることとの間には何か関係があるのでしょうか。

次に、井出先生に対する質問です。私の出身地である北海道には負の遺産と言えるものが非常に多くありますが（例えば、井出明「小樽ダークツーリズム紀行」DARKtourism JAPAN VOL.1（平成27年）12頁以下がある。）、そのすべてが観光資源となる訳ではないように思われます。そうだとしますと、負の遺産を観光資源化できる条件、それが多くあるのであれば井出先生が特に重要と考えておられるものは何でしょうか。

以上、宜しくお願い致します。

三浦　ご質問いただき、ありがとうございます。宗教についてということなんですが、荒畑寒村が述べていることなんですが、結局晩年なんですね、田中がいろんな宗教をやっていくのは。寒村が述べているのは、晩年、田中は孤独だったと。皆離れていくんです。先ほど申し上げましたように、谷中村廃村を第２次鉱毒調査委員会が打ち出したことで、それより上流の人々は助かると思い、谷中村廃村に反対し続ける田中のもとを離れていく。

田中は孤独だったので、宗教に走ったんだろうと寒村は指摘しています。私もそう思います。宗教の信仰の仕方が一種独特です。まずキリスト教だけというわけでもなかった。聖書を読んだり、新井奥邃という人の所に通ってキリスト教を学んだりする一方、全然違う岡田式静座法といった修練みたいなある種の宗教っぽいこともやったりする。いわゆるコテコテの信者ではない。これだけを信じるっていう信者ではなくて、孤独な心の拠り所を求めて宗教に近づく。また聖書を読んで神を信じるというより、聖書の道を実践するんだと、自分のやっていることを聖者の行いに重ね合わせて、心の拠り所を求めるといった感じで、一種独特な、けれども孤独ゆえのひたむきな宗教への接近だったと思います。

その宗教とリベラル・デモクラットの関係ですが、たしかにジョン・ロックに見られるようにリベラリズムと宗教というのは緊密に結びついた問題ですが、私自身これまで田中の場合について考えたことがなかったので、むしろ良いご指摘をいただき、これから勉強してまいりたいと思います。ありがとうございました。

井出　負の遺産を観光資源化できるかという話なんですけども、どんなに意味のある遺構であったとしても、人が行かないと廃虚になってしまうんですね。ダークツーリズムの方法論でどうやって観光地にしていくかっていうと、まずはちゃんとした経済圏があって、そこの中から行ける所じゃないと観光地にならないんです。アウシュビッツはクラクフから50キロ程度でして、日帰りで行けます。クラクフを起点にアクセスが良いので、現代まで残る世界遺産になりました。北海道だと紋別の奥のほうに鴻之舞金山という産業遺産があって、あそこは近代史では結構重要な所なんですけども、行きようがないんです。紋別自体がかなり斜陽化していますし、わざわざ鴻之舞金山まで行って石碑を見て帰ってくると１日が終わってしまうので、かなり難しい。ちゃんとした経済圏があって、その経済圏の中に組み込んで観光行動を取れるようにしないと、負の記憶っていうのがつながらないので。あと、開発するときにこれは観光開発一般の話ですけど、一筆書きでやるっていうのが大原則です。行って同じルートを帰ってくるっていうのは観光行動的にはかなりお客さんが退屈してしまうのです。さっきの佐呂間の話もですね、サロマ湖と栃木地区については実は回遊ができるルートが取れるんですよ。サロマ湖のホタテも実はダークツーリズム的な要素があって、ものすごく苦労してホタテが取れるようになったというストーリーがあっていい話なんですけど、その栃木地区の畜産も農産物が全然育たない中で何とか畜産で地域振興をした話が結構感動的でして、それを回遊して佐呂間全体を見て、道の駅で視察に来た人にサロマ湖のホタテと畜産関係の製品を食べてもらったりすると、旅としての完成度が高くなります。ご飯食べるというのは、実は食べ物だけを食べているのではなくて、文化も一緒に食べるわけですから、その感動のストーリーを聞くと目の前のホタテもバターもより一層旨く感じるわけですよ。

一方通行で動線をつくるというのは先程の渡良瀬川の上流から下流までを考えても当てはまります。下流から上流に行ってもいいんですけども、一方通行で多くが見られる観光地というのは実は日本にもそんなになくて、ここは恵まれています。観光学的にいうと、行ったり来たりじゃなくて、１回の一筆書きで回れるっていうのは実はすごいことなんです。そのときには自治体間調整が必要になります。観光庁の言い方だと「広域観光」という言葉がありまして、現在この考え方に基づいた観光開発が各地で進められています。例えば、島根県と鳥取県なんかは中海観光圏という概念があり、米子空港に入って境港を見

て、その後、出雲とか松江を見て、出雲空港から帰るとかそういうことができるようになっています。そういった県や自治体を越えて連携できればいいんですが、中海の場合は光の観光資源だけでみんなワッて集まったんですけど、こちらの場合は地域のつらい記憶と向き合わなきゃいけないんで、それで観光開発やるとなるとかなり自治体関係者に覚悟がいります。そんなことをやるのはしんどいわけですよね。ですけど、実は地勢的に恵まれてるということを、渡良瀬遊水地の関連自治体の人には意識していただきたいなと思います。

清水　ありがとうございます。５時そろそろ近づいてきましたが、ございますか。どうぞ。

聴講者４　小山市会議員をしております。先ほど井出先生に小山市が大変失礼なことをしたなと思い、行政に関わるものとしておわび申し上げます。井出先生から、まずは観光であっても物見遊山で来ても緩いつながりで、そこからまた足を伸ばしてくれればつながっていくんだっていうお話がヒントになったところです。ただ、渡良瀬遊水地は小山市の本当に一部なので、他の自治体との調整が大事なのですが、自治体間で温度差がありとても難しいところもあります。その辺、何かありましたらお願いします。

清水　時間的な都合もありますので、先生方に最後に一言、言い残したこと、言っておきたいことなど、今のご質問に対する回答も含めて、まずは井出先生からご意見をお伺いして、そして三浦先生という順番でいいですか。よろしくお願いします。

井出　ダークツーリズムと観光開発の論点でキーワードになるのに世界遺産っていう言葉があります。日本だと世界遺産に指定されると観光客が来てくれるって思っている人が多いのですが、もともと世界遺産の仕組みが作られた理由というのは、観光を始めとする濫用的な消費から遺産となるべき対象を守るという趣旨だったのです。日本人の場合、理解が逆なんですね。理解が逆になった経緯は割と観光学の間でははっきりしてまして、ある場所が政治的な折衝で世界遺産に登録されて田舎の町に突然観光客が来て、それを見た日本全国の人たちが世界遺産であれば観光客が来るんだって思ってしまったんです。そのせいで観光と世界遺産が結び付いたんですけども、実はもともとは観光客から守るという趣旨があります。

それでも世界遺産になると、いいことがいっぱいあって、地域の人たちの誇りにもなります。21世紀以降、特に世界遺産に登録されようと思ったらならば、ダークツーリズムの観点がないと登録が難しくなってきています。毎年、新しく登録されるわけですが、負の遺産の側面を持っているところが増えています。来年、「長崎天草のキリスト教遺産群」が世界遺産になる予定ですけれども、あれも最初、２年前、禁教時代に信仰を守って250年耐え続けた人々がいますというので麗しいストーリーを書いてユネスコに送ったところ、怒られたわけですね。江戸幕府は何人も殺しただろうと。そのことにもっと焦点当てなさいという返事が来て、それで書き直して再度登録に向かって話が進んでいます。世界遺産になろうとした場合、ダークツーリズムの視点がますます重要になりつつあります。世界遺産になりたいと思っている地域はいっぱいあって、そういうところに対して、世界遺産になりたいのであれば「負の記憶」に対して背を向けてはいけないという意識を持ってもらうと良いでしょうね。

清水　三浦先生、お願いいたします。

三浦　きょうは井出先生とご一緒させていた

だいて、知らなかったことをたくさん知ることができて、ありがたく思っております。こういう機会を設けてくださった法政策研究所にも感謝申し上げたいと思います。

最後に言い残したことをということですが、明日から気温が急降下するらしいので、お体にお気を付けください（笑）

清水　念のいったご発言ありがとうございます。時代を超えて守らなければいけない価値というものを三浦先生に教えていただいたような気がします。それから、現場を残していくこと、現場に立って人々が何か考えていくこと、そういう契機を意識的に作っていくという点で、井出先生のお話はとても興味深かったと思います。私ども研究者がやれることがあれば努力したいなというふうに思います。

本日は大変多くの方にいらしていただき、ご発言、ご質問をいただきまして、大変ありがとうございました。ディスカッションはこれで終わりにいたします。

岡田　どうもありがとうございました。３人の先生がたに改めまして拍手をお願いいたします。また長い時間お付き合いいただきましたフロアの皆さまにも心より感謝を申し上げます。

最後に、法政策研究所から一言ごあいさつを申し上げたいと思います。法政策研究所は、法学部教員が中心となって運営する研究所でございます。このような形での講演会の開催をはじめ、学内外との共同研究、外部からの受託研究、講師派遣、機関誌の発行など行っております。そうした活動を通じ、本学教員の研究・教育活動を促進・支援し、学術的な観点からの地域貢献に努めているところです。

今回の講演会を企画するにあたり、一つ念頭に置いたテーマとして、「都会目線」の克服ということがあります。私自身の専門である憲法学に引き付けて申しますと、憲法学はとかく普遍的な理論、つまり日本全国どこでも通用するような理屈を作っていくという伝統がございます。しかし、実際の事件は、何とか県何とか市、あるいは何とか村何とか町という所で起きてるわけです。その地域固有の事情もあります。ところが、憲法学の視点はどうしても東京でも通用する、北海道でも通用する、沖縄でも通用する、そういう「都会目線」の非常に抽象的な無味乾燥な理屈を作るというところに偏ってしまいます。

ここに学生が多くいますけども、公務員試験、あるいは司法試験とかで出るまさに憲法学の試験というのは抽象化された理論を一所懸命にやるということに他なりません。ただ、それではいくら勉強しても実務的に何の役に立つのか分からないというところが多々あると思います。そういう中にあって、本日の講演会のように、地元に根ざした具体的な問題に目を向けながら、本来的な人権というものを考えていく。特段、人権教育を受けたことのないような明治の人たちが人権意識をなぜ持てたのかとか、それを21世紀のわれわれがどういうふうに今後生かしていくのかというところのヒント、そこも含めてこの法と政策というものの融合というのが必要だろうと思っております。そういう意味で、今回の企画は非常に良かったなと思います。また今後とも皆さまのご要望を取り入れまして企画を立てていきたいと考えておりますので、ぜひご参加いただければと思います。

いま一度、今日ご出演の先生がたに拍手をいただきまして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

（了）

[講演者プロフィール]

三浦顕一郎（ミウラ　ケンイチロウ）

所属・職名　白鷗大学 法学部　教授
最終学歴･学位　早稲田大学大学院後期博士課程・政治学修士
専門分野　政治学、日本政治史、日本思想史
学協会活動　日本政治学会、政治経済学会、日本歴史学会、明治維新史学会

井出　明 (イデ アキラ)

所属・職名　追手門学院大学　経営学部 マーケティング学科　教授
最終学歴･学位　京都大学大学院情報学研究科博士課程・博士（情報学）
専門分野　社会情報学、観光情報学
学協会活動　日本観光研究学会、日本観光学会、地域安全学会、進化経済学会、情報処理学会

清水　正義（シミズ　マサヨシ）

所属・職名　白鷗大学 法学部　教授
最終学歴･学位　東京大学大学院社会学研究科博士課程・国際学修士
専門分野　西洋史学
学協会活動　歴史学研究会、ドイツ現代史学会、歴史学会